

(抄録)

研究課題名：メアリー・シェリーの『ヴァルパーガ』における、史実と歴史ロマンスの倫理的問題

研究代表者名：市川 純

メアリー・シェリーの『ヴァルペルガ』は、14世紀イタリアのルッカの君主カストルッチョ・カストラカーニを主人公に据えた歴史ロマンスである。カストルッチョは実在の人物だが、シェリーはそこに2人の架空のヒロイン、ユーサネイジアとベアトリーチェを描き、カストルッチョと複雑な関係を結ぶ。男性中心的な既存の歴史記述に新たな視点を加え、マキャヴェッリの「カストルッチョ伝」では英雄的にも描かれるカストルッチョをむしろ暴君と捉え、その元で犠牲になった人々、特に女性の声を描いている点は、これまでの研究である程度一致して指摘されている。

ただ、マキャヴェッリの「カストルッチョ伝」の捉え方や、参照されるウィリアム・ゴドウィンの小論「歴史とロマンスについて」については、さらに整理が必要である。『ヴァルペルガ』序文で、シェリーは上記「カストルッチョ伝」を「ロマンス」と呼んでいるが、ロマンスの捉え方には注意が要される。

マキャヴェッリ研究によれば、「カストルッチョ伝」はそもそも文学作品として捉えるべきもので、史実としての正確さを期待すべきものではない。だが、『君主論』のイメージもあって客観的歴史記述が期待され、それに違背する不正確な内容が批判的にとらえられてきた。

歴史ロマンス『ヴァルペルガ』はマキャヴェッリの「カストルッチョ伝」にある種の対抗を試みた作品と読めるが、後者がそもそもある種のロマンスであれば、序文でこれを「ロマンス」と呼ぶことは、果たして批判となりうるのか。むしろ、『ヴァルペルガ』は同じロマンスというジャンル内で、別のアプローチによるカストルッチョ像を提示したと考えるべきではなかろうか。

また、ゴドウィンの小論によると、真の歴史記述とは事実の羅列ではなく、限られた

情報をいかに緊密に纏め上げるかという意味で、ロマンスと類似性を持つものである。従って、ゴドウィン用語法では歴史とロマンスは対立していない。『ヴァルペルガ』が歴史に対抗するロマンスであるかのように語るには、ゴドウィンの説明との整合性が問われる。

『ヴァルペルガ』が史実に書かれない女性の声を描いているにせよ、それはロマンスというジャンルを経由している。19世紀においてはスコットという男性作家によって代表される歴史ロマンスであるが、それ以前に様々な女性作家も活躍しており、女性と歴史記述の問題は、より広い視野で再検討する必要がある。